

「私たちは光の子ども」

～主の光がすべてを明らかにする～

「だれも、これらの罪を罪でないものように教える、むなしい言葉にだまされてはいけない。こういうことのために、神の裁きか河従順な者たちの上へ下って来る。」「あなたかたは、以前は暗闇の生活をしてきたが、今は主を信じて光の生活に変えられた。だから、光の子供らしい生活をしなさい。——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実である。——また、主に喜ばれることか河であるかを、わきまえ知りなさい。つまらない陰に隠れた悪事の仲間入りをしないで、むしろ、それを神の御前に持ち出しなさい。」「光であられる神の御前に持ち出されれば、陰に隠れた悪事は消え、光となる。」

エペソ人への手紙5章6,8-11,14a節 [現代訳]

阿部知事の護国神社会長職について憲法学者たちによって問いただされている。政教分離の問題です。知事は「私人としてやったことです」と言い訳をされたが、現役の知事がその立場を持ったままでは問題はあるだろう。少々いい加減なところが露呈されてしまいました。今までは当たり前のようにして黙認されてきたことが問題視された出来事でしたが、最近では、そのように以前は黙認されてくることができたが、ここに来て顕在化され、問いただされる出来事が多くなってきていると感じています。

さて、私たちクリスチャンの立場は、暗闇から光へ、イエス様によって罪赦されて、隠れている必要がなくなり、“さあ、出てきなさい！”と言われるかのようにして、光の世界へと導かれました。私たちはもう光の無い世界へは逆戻りすることはあり得ない状況に変えられました。しかし、真実を言えば、世界中のすべての人は、神の目から見れば、決して逃れられる人は一人もいないわけですので、暗闇で隠れてやれたと思っていても、それは、神の目から見ればすべてが明らかであるわけです。だから、きちんと覚悟を持って、神の御前で生きることを決心した方が、断然、生きやすい状況になるわけです。

エペソの町にはアルテミス神殿があり、アルテミスはゼウスの娘で、豊穡の神として祭られていました。また、祭りの中では、神殿売春が堂々となされていました。そこに世界中から大勢の人々が参拝しにやってきて、大きな経済的繁栄をもたらしていました。そんな社会の中であって、キリスト者が全能の神、創造主なる神に従う、清められた存在として生きていくためには考えられないような戦いがありました。しかし、そのような社会だからこそ、キリスト者の生き方は、はっきりとその違いが表されていたことも事実だったと思います。「眠っている者よ、起きなさい！ 死人の中から、立ち上がりなさい！」とパウロが引用した箇所は不明だが、以前は死んでいたような存在だったが、今は、キリストにあって、光とされている私たちの人生をしっかりと思う存分いきいきと光の子らしく歩みなさい！と主ご自身も励ましておられると感じています。